Kazuo SHIRAGA The style of painting

白髪一雄記念室 開設記念展

白髪一雄

―描画の流儀―

2013年11月2日(土)―12月1日(日)

尼崎市総合文化センター 美術ホール(4階)

白髪一雄は、天井から吊り下げたロープにつかまり、床に置いたキャンバスに油絵の具をのせてその上を素足によって描くという独創的なアクション・ペインティングによって、世界的に高い評価を受けました。絵の中に自ら入り込み格闘することによって生まれるエネルギーに満ちた作品は、観るものを圧倒すると同時に深い精神性を感じさせます。

白髪は1924(大正13)年、尼崎市に生まれました。新しい絵画表現を模索している30歳の頃に足で描くことを試み、それは前衛芸術グループ「具体美術協会」に入会して活動する中で白髪独自の描法として確立していきました。そして、2008(平成20)年に亡くなるまで、アクション・ペインティングの道を一途に歩みつづけたのです。

尼崎市総合文化センターでは、尼崎市の協力のもと、平成20年度より『郷土画家「白髪一雄」作品整備・発信事業』を立ち上げ、作品の調査や展覧会の実施、作品の修復、小学校への出前授業など、様々な活動を通して白髪一雄の画業を紹介することに努めてまいりました。そしてこの度、尼崎市所蔵の作品と資料を公開し、より多くの方に白髪の芸術と人物の魅力を身近に感じていただけるよう、当センター内に白髪一雄記念室を開設いたしました。

本展はこれを記念して開催するもので、作品とともに画材道具など関連資料を展示し、白髪の独創的な描画方法が生み出された経緯や作品の変遷をご紹介します。

本展では、白髪が絵筆で描くことから離れアクション・ペインティングに移行する時期からの作品をご紹介しますが、それ以前に描かれた初期の貴重な作品を記念室で公開します。併せてご高覧ください。

―アトリエ検証―

❶《本能の結集》1952年

❷《流脈(るみゃく)1》1953年

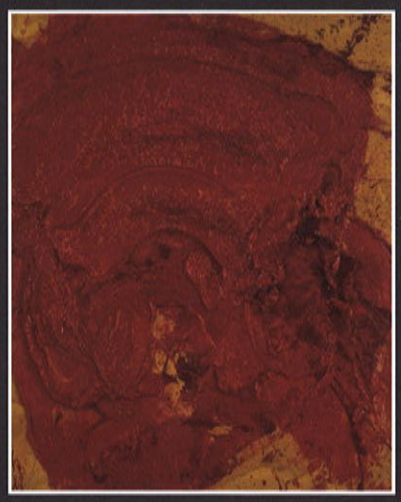
白髪の関心がモチーフを抽象化して描くことから内面的なものを表現する方向へと変化している様子が《本能の結集》の画面と題名の両方からうかがえます。この時期の油彩画はまだ下絵をもとに描かれていましたが、ある日、白髪は描いている絵が失敗だと思い画面の絵の具をペインティングナイフで拭っているうち、構図や色感がなくても手の動きと絵具の流動感だけで面白いものが表現できていることに気づきます。そこから《流脈１》《脈モノクロームA》《文B》などが次々と生まれ、続いて、爪や指先、そして足で描くアクション・ペインティングへと、約2年のうちに白髪の描き方は大きな変化を遂げていきます。

❺《天傷星行者(てんしょうせいぎょうじゃ)》1960年

❻《天富星撲天雕(てんぷせいはくてんちょう)》1963年

白髪の代表作である〈水滸伝シリーズ〉108点の中の2点です。このシリーズのほとんどの作品は1950年代後半から60年代半ばまでの間に描かれたもので、白髪がフランスの批評家、ミシェル・タピエと契約を結んで多数の作品をヨーロッパに送っていた時期に重なります。白髪は送り出す個々の作品を区別しやすいように、幼少時から愛読していた中国の物語『水滸伝』の主人公の名を題名に用いました。1960年に描かれた《天傷星行者》は、四方に散る絵具の飛沫と画面から飛び出す黒の線が激しい印象を与えますが、3年後の《天富星撲天雕》は色彩も豊かになり、画面をぐるりと取り囲む線によって、より装飾的になるなど、この数年間にも作品の変遷がみられます。絵の構図や色彩を否定するところから始まったアクション・ペインティングも、続けていく中で多様に変化し、64年頃から白髪は足や手だけでなく木片を用いることを試み始めます。

❸《無題》1959年（尼崎市立成文小学校）



❹《無題》1960年代（尼崎市立竹谷小学校）

《無題》（尼崎市立成文小学校蔵）は白髪が同校で教鞭をとっていた頃の作品です。白髪の作品としては珍しく、キャンバスに油彩で描いた後に引き裂いた紙のようなものが張り付けてられています。この時期は、具体美術協会入会後に数年間続いた立体的な作品やパフォーマンスを重視した作品から、油彩画を中心に制作し始めた時期にあたります。コラージュ作品としては猪の毛皮を張り付けた大作《猪狩壱》《猪狩（弐）》（共に1963年）が知られていますが、そのように張り付けられたものが主題となるようなものではなく、絵の構造を複雑にする一要素として実験的に紙が張り付けられたと思われます。《無題》（尼崎市立竹谷小学校蔵）は、足で描くよりも幅広く、木片などで描かれたと思われる弧が赤で描かれ、その描き方や色調は同年代1965年の大作《丹赤》と似た点がみられます。白髪はアクション・ペインティングのための下絵は描いていませんでしたが、大作を制作する際にこれらの比較的小さな作品で様々な描き方を試していたとも考えられます。

白髪は30代から猪撃ちのために度々山に出かけていました。そこで目にした石塔や石仏に刻まれた梵字から密教に関心を持ち始め、71年には比叡山延暦寺で得度します。素道（そどう）という法名を得た白髪は70年代以降、密教を主題とするシリーズを描き始めました。白髪は多くの場合、描いた後に題名をつけていたようですが、これらは事前に仏をイメージして色を選んで描いたといいます。《密呪》のように〈密教シリーズ〉の多くは足で描画した上から木片で円が描かれていますが、円輪は密教で重要な表象であったためです。密教という主題はその後も続きますが、再び足だけで描くようになった70年代後半には円を描く作品はほとんど描かれなくなりました。

❽《密呪（みつじゅ）》1975年

❼《大威徳尊（だいいとくそん）》1973年

❾《祝いの舞》1981年

尼崎市総合文化センターの大ホール（現・あましんアルカイックホール）緞帳（どんちょう）の原画として依頼を受けて描いたものです。当時、白髪は再び足のみで描くようになっていましたが、この作品は例外的に木片を用いています。豊かな色彩の扇型が折り重なる画面は、扇を手に舞う能や狂言などを連想させ、日本の伝統芸能に造詣が深かった白髪らしい作品です。白髪は1955年に自らも《超現代三番叟》という舞台作品で、長い袖を付けた赤い衣装を着て弧を描きながら舞うというパフォーマンスを行っています。アクション・ペインターならではの躍動感あふれる画面は、今から始まる舞台に対する気持ちの高揚感を表しているようにも見えます。

『白髪一雄 ―描画の流儀―』 ―展示作品リスト―

	作品名	制作年	サイズ（cm）	技法・材質
❶	本能の結集	1952	91.3×116.5	油彩・キャンバス
❷	流脈1	1953	80.0×116.5	油彩・キャンバス
❸	無題	1959	90.0×72.0	油彩・紙、キャンバス
❹	無題	1960年代	90.0×72.5	油彩・キャンバス
❺	天傷星行者	1960	183.0×273.0	油彩・キャンバス
❻	天富星撰天雕	1963	184.0×276.0	油彩・キャンバス
❼	大威徳尊	1973	196.0×195.0	油彩・キャンバス
❽	密呪	1975	181.0×227.0	油彩・キャンバス
❾	祝いの舞	1981	91.0×116.7	油彩・キャンバス

※作品はすべて尼崎市蔵

❽《無題》1951年

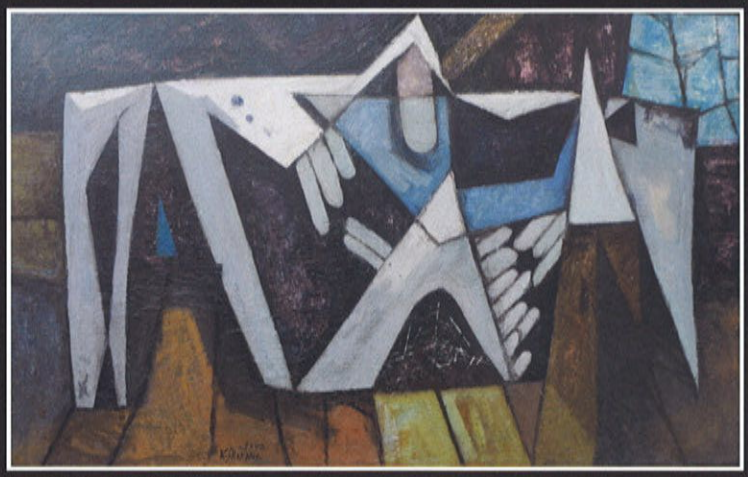
❿《妖草Ⅱ》1952年

白髪一雄記念室　第1回展示

「初公開　甦(よみがえ)った初期作品を中心に」

Kazuo SHIRAGA's Room 1st exhibition "Focus on the restored works"

初公開する初期の油彩画4点は、白髪の没後、自宅の倉庫に木枠を外して巻いた状態で見つかったものです。白髪の最初期の作品は現存するものが少なく貴重であるためご遺族から寄贈していただきましたが、傷みがひどく2年をかけて修復し、この度美しく甦りました。これらは白髪が洋画家として歩み始め、新制作派協会の展覧会に出品していた1950〜52年頃の作品で、白髪が〈部屋シリーズ〉と名付けていたものです。≪妖家具≫≪妖草Ⅱ≫≪陰火≫などにみられる題名と闇を思わせる暗い色調からは、当時の白髪の関心が、夜の室内とりわけ「暗い物置の中に妖気を帯びたような」空間であったことがわかります。そこに描かれているものは、月の光を浴びているかのようにほのかに白く浮かび上がり、暗闇の中でうごめいているようにも見えます。これは白髪が愛読していた中国文学や、グリム童話やホフマンの小説などドイツ文学からの影響によるものですが、白髪はその頃よく見る夢をそのまま絵にしていたと語っています。当時、白髪は意識下にある世界を表現するオートマティスムの手法を取り入れて小さなペン画を無数に描き、その中から選んだものを油絵として作品化していました。このオートマティスムの手法は、白髪が自らの「精神」をより直接的に表現する手段として、その後の身体を使ったアクション・ペインティングへと繋がっていくことになります。



❾《妖家具》1952年

❼《陰火(いんか)》1951年

展示作品リスト

作品名	制作年	サイズ(cm)	技法・材質
❶ 尼崎与茂川つづみ	1947	25.8×37.3	水彩・紙
❷ 尼崎西本町三丁目付近	1947	25.8×37.3	水彩・紙
❸ 尼崎工場界2	1948	30.5×43.5	水彩・紙
❹ 二階窓外の景	1948	35.0×26.8	クレヨン・紙
❺ 鳥檻	1949	90.2×71.3	油彩・キャンバス
❻ 夜の風物	1950	50.1×65.3	油彩・キャンバス
❼ 陰火	1951	91.5×115.5	油彩・キャンバス
❽ 無題	1951	131.0×145.5	油彩・キャンバス
❾ 妖家具	1952	73.0×117.0	油彩・キャンバス
❿ 妖草Ⅱ ※	1952	109.3×230.3	油彩・キャンバス

※作品はすべて尼崎市蔵

※ ❿《妖草Ⅱ》は作品が梱包されていた紙に《妖草》とタイトルが付されていましたが、同名の別作品(所在不明)が写真で確認されたため、便宜的に《妖草Ⅱ》としています。